

ログライン

裁判官を夢見る主人公は事故で死亡するが、地獄で開催される歴史上の人物専用の裁判、「歴史裁判」において、弁護役を引き受ければ生き返れるといわれ挑戦することに。

(少し長め)

幼い頃から父親に正義を貫けと教えられ裁判官になることを夢見る主人公は事故で十代の若さで死亡する。

その頃、極楽は経営が悪化していた。

原因は、観光資源となる歴史上の英雄が皆地獄に行ってしまうためだった。

ちょうどその時「歴史裁判」が行われる。

歴史裁判とは、歴史上の人物専用の裁判で

彼らの極楽行きを掴み取ることができる

最後の裁判だった。

主人公は、この裁判で弁護士役を引き受けて

英雄たちの減刑を勝ち取れば

生き返らせても良いと条件を出される。

多くの人を殺してきた英雄たちの弁護するか悩むが、

結局引き受ける。

こうして、地獄の利権を守るため不正をしても有罪を勝ち取るうとしてくる閻魔検事と、裁判長アマテラスがいる地獄へ向かう。

日本史 最後の審判 (仮タイトル)

登場人物

花散里 蛍・・・主人公。弁護士のお卵。

見た目は十代くらいの女の子。



鏡・・・主人公の相棒。

地獄にあると言われる真実を移す鏡「浄玻璃の鏡」を模した量産型のような存在。地獄の住人はスマホのような感覚で連れて歩く。

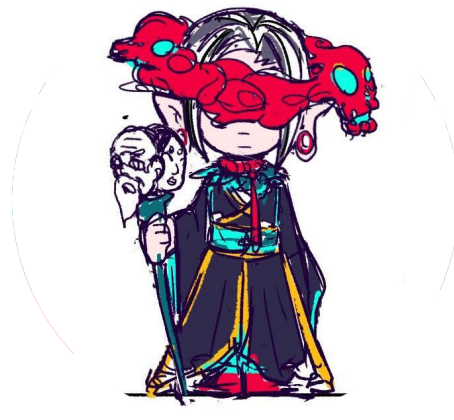
主人公が、天国側から支給されたものだが、訳あって故障しており、写すデータが破損している。自分の意思で喋るが、歴史の知識などはない。



天・最高神アマテラス、裁判長役



閻・閻魔王、検事役



鬼・地獄に住んでいる小鬼。



スタート
冒頭 裁判前のシーン

主「どうしよう・・・
キンチョーしてきたよ。」

鏡「蛭ちゃん！」

主「鏡ちゃんー!!」

鏡「どうしたの？」

緊張してるの?」

主「だって・・・」

『歴史裁判』の話は聞いたけど、
いざとなると緊張するよ。」

鏡「それは誰でも一緒だよ。

今回の歴史裁判は

1500年ぶりだからね。

前回を知ってる人の方が

珍しいよ。」

主「そうだね。

一緒に頑張っていこうね。」

鏡「でも、初めての歴史裁判で

弁護する相手・・・

運が悪いよね・・・。

だって今回弁護する人、

よりによって殺した相手が

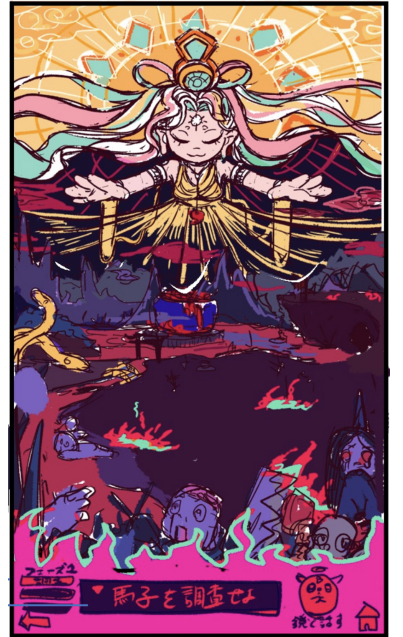
『天皇』でしょ?」

流石に弁護できないんじゃないの?」

主「・・・まあ、そんなんだけど。

あ、噂をすれば・・・。」

※蘇我馬子登場



主「だいぶひどくやられているね。」

鏡「まあ、犯した罪が大きいからね・・・」

主「独白」

私の名前は花散里 蛭（はなちるさと ほたる）

ある事情があつて、

歴史裁判の弁護士を

引き受けることになった。

今回弁護する相手はこの人。

この人はずっと昔、

『天皇』を暗殺した人。

私はこの人を弁護しなければ
ならない。

とは言つても、

この人が犯した罪はもう確定している。

確実に『有罪』。

だから死んだあと、

こつやつて地獄の責め苦を

受けてきた。

この人を救う方法はただ一つ。

それが『歴史裁判』

他の裁判とは違う特殊な裁判・・・」

鏡「さあアマテラス様のところに行こう。

アマテラス様をタップしてみて。

世界の最果てに立つ女神様だよ。」

場面 アマテラスの元へ。

天「おはよう。」

今回私は何年くらい寝てたのかしら?」

閻「大体千五百年くらいです。」

天「あら。」

随分長い間眠ってたのね。」

主「私が今回歴史裁判の弁護士を務める
花散里 蛭です。」

天「あらあら。」

可愛い弁護士さんね。」

閻魔ちゃんもおはよう。」

1500年ぶりね。」

私が目覚めたということは

歴史裁判を開くということですね。」

閻魔ちゃん。」

念の為、裁判のルールを

みんなに説明してちょうだい。」

閻「かしこまりました。」

本来の裁判は、無罪か有罪かを明らかにする。

罪を犯していなければ無罪。」

罪を犯していれば有罪。」

しかし歴史裁判は違う。」

裁かれるのは歴史上の有名なのみだ。」

彼らは無罪とは無縁の関係だ。」

直接人を殺す、誰かに命じて人を殺す。」

無能な政治で、数えきれない人を死に追いやる、。」

『英雄功成りて、万骨枯れる』だな。」

主「え、、、どついうことですか?」

鏡「『英雄功成りて、万骨枯れる』

』えいゆうこうなりて、ばんこつかれる』



一人の英雄が歴史に名を残した陰で、多くの名もない人が犠牲になっている、ってことだよ。」

閻「当然彼らは、地獄行きになる。」

が、、、救いが無いわけではない。

アマテラス様がお目覚めになった時に開かれる特別な裁判、、、

すなわち『歴史裁判』だ。」

天「歴史上の人物たちは

権力を握る過程で

何かしら悪事を働いています。

しかし、悪事をおこなって得た権力でもその後、その権力を使って

世の中に貢献していれば

それを功績とみなします。」

閻「そして減刑を認められ

この無限地獄から抜け出すことができる。」

天「では確認をかねて私から確認します。

最高神である私は、裁判長を務めます。

最終的な判決を下します。

そしてそこにいるのが閻魔ちゃん。

『検事』ですね。

そして裁かれる人が『被告人』。」

鏡「そして僕たちは、、、」

主「被告人を弁護して、天国行きを勝ち取る役。

すなわち『弁護士』だね。」

鏡「その通り。」

天「準備はできたようですね。

ではこれより

一人目の歴史裁判を

開廷します。」

閻「こちらは問題ありません。」

天「では閻魔ちゃんに冒頭陳述してもらいましょう。」

鏡「冒頭陳述？」

主「検事である閻魔大王が、

被告人の悪事を、

簡単にまとめて述べるのだよ。」

鏡「り、了解！」

閻魔の冒頭陳述

★閻「今から千四百年ほど前。
奈良の都の出来事だ。」

★閻「被告人の名前は
蘇我馬子（そがのうまこ）」

★閻「馬子は政治上のライバルを
次々に殺害した。」

★閻「さらには「絶対に殺してはならない人」
まで殺害した。」

★閻「馬子は、邪魔者を殺し、政治を私物化する
極悪人である。」

★主「まずは聞き込みで
少しでも情報を集めないと。」

★鏡「追加で情報が手に入るかもね。」

今から千四百年ほど前。

奈良の都の出来事だ。

に聞き込み

閻 「被告人が生きた時代は
西暦の〇〇年前後だ。
当時日本の中心だったのは
現在の奈良県だな。」

主 「そこで権力を握っていた人が
今回の被告人だね。」

鏡 「600年頃か。
メモっておこう。」

被告人の名前は
蘇我馬子（そがのうまこ）
に聞き込み

閻 「当時たくさんいた有力者達の中で
最有力だった一族・蘇我氏のトップだ。」

馬子は政治上のライバルを
次々に殺害した。
に聞き込み

閻 「蘇我氏は有力な一族だったが
ライバルがいなかったわけじゃない。
だが邪魔者は次々に消されていった。」

主 「馬子さんに殺された、ってことか。」

閻 「最大の被害者は
物部守屋（ものべも もりや）という有力者だ。
信心深い男で、
宗教関係の行事なども担当していた。」

天 「あら、神様を大事にする人は
好感を持てるわね。
たとえばそれが私じゃない
神様でもね」

※人物ファイルを更新

人物ファイル

物部守屋



馬子のライバルで馬子に殺された。
信心深い人物だった。

さらには「絶対に殺してはならない人」
まで殺害した。

に聞き込み



主「馬子さんを弁護できるかどうか・・・
その最大の論点・・・。
それがここだよね。」

閻「馬子は当時の天皇を部下に命じて殺害した。

その上、その部下も口封じで殺した。

長い日本の歴史の中で

天皇殺しをやった家臣は

馬子ただ一人だ!」

※人物ファイル???天皇取得

馬子は、邪魔者を殺し、政治を私物化する
極悪人である。

に聞き込み



主「確かにそう言われても仕方ない。」

鏡「同僚を殺す、

上司は殺す、

部下も殺す。」

主「これは・・・凄まじいな・・・」

※閻魔の冒頭陳述に対して
全て聞き込みが終わったら
強制的に次のセリフへ

天「どうですか、主人公ちゃん。

繰り返しますが


これらの悪事は**事実**です。

弁護の余地などありません。

問題はその後・・・」

主「そうやってまで握った権力で

何か成し遂げたのか?」

人物ファイル	
???天皇	
	馬子に殺された天皇がいるらしい。

天「その内容次第では
減刑の判決を下します。」

主「調査の時間をください。
必ず馬子さんを救って見せます。」

場面 裁判から一度抜け出し、
情報集めをしようと決める二人

主「とにかくまずは情報を集めよう。」

鏡「まずは被告の馬子さんのところだね。」

主「馬子さんはどこにいるの?」

鏡「ここだよ。」

※馬子の場所、赤枠で強調

鏡「見にくければ、拡大してみてね。」

※プレイヤーに馬子タップしてもらおう

場面 被告蘇我馬子のところへ行く主人公。
最初に管理人である小鬼と少し話す。

主「おお、やってるやってる。」

鏡「馬子さん、責められてるね。」

鬼「あ！弁護士の○○さんに鏡!」

主「馬子さんのことを
調べてるんだよ。」

鏡「何か知ってることがあったら教えてよ。」

鬼「僕は管理をしてるだけですから・・・
あまりお役には立てないかと・・・。」



それに僕の上司は
閻魔様だし。」

主「知ってることだけでいいよ。」

【あなたは？】

鬼「僕は○○。

鬼の子だよ。

このオーダーメイド地獄の
管理を任されてるの！」

※選択肢が増える

【あなたは？】

【オーダーメイド地獄？】

鬼「歴史上の人物が死んだ後に来るのが

この地獄だよ。

何せ普通の人とは違うからね。

責め苦の内容も特別なんだ。

具体的にいうと

その人物が生前におこなったことに

関連した責め苦になるんだよ。

一人一人に合わせて作られた地獄、

オーダーメイド地獄、だよ。

僕はその管理人なの。

今日も元気に責め苦を受けてるかどうか、

異常がないかチェックしてるんだ！」

鏡「頑張ってるんだね。」

主「情報を知ってたら教えてくれないかな。

わかる範囲でいいんだ。」

鬼「うーん。

僕は一応、閻魔様の部下だからなあ。

それに僕あまり歴史知らないし。

閻魔様がいつも話してくれる内容くらいしか

わからないよ。」

主「それでもいいよ。」

鬼「うんわかったよ。」

馬子さんのことで気になる部分があったら
タップしてみてください！」

場面 馬子の調査が始まる

プレイヤーは、

馬子のイラストの気になる部分を

タップできる。

するとそれに関する会話が始まる。



※1についてタップされた場合

主「骨が見えてゾンビ化してる・・・」

鬼「これは当時の『高貴な身分の人』の
お葬式に関係があるんだよ。

馬子さんってすごく**身分が高い人**を
殺してるよね？

えっと・・・誰だっけ？」

主「教えてあげないと、話が進まないね。」

鏡「今まで手に入れた人物カードから
選択してみよう。」

※[天皇家人物ファイル選択](#)

鬼「そうだったね。」

馬子さんは天皇暗殺後、

すぐに『土葬』、

つまり土に埋めて

埋葬しちゃってるんだよ。」

鏡「何か問題があるの？」

「！火葬しなきゃいけなかったとか？」

鬼「当時は天皇が亡くなった時には

『もがり』をするのが普通なの。」

主「もがり？」

鬼「高貴な人が亡くなると、

すぐには埋葬しないのが

当時の常識だったんだ。

棺の中に放置して、

腐敗して白骨化するのを

見届けるんだよ。」

主「そ、それ自体が地獄の儀式なんだけど・・・」

鬼「当時はそれが偉い人に対する

正しい儀式方法だったんだよ。」

鏡「まあ時代が変われば常識も変わるから。」

鬼「馬子さんはその儀式をせずに

すぐに土葬しちゃったんだ。

このまま放置すると

恨みが元になってたたりをなす、

って考えたらしいよ。」

主「その報いとして

もがりされてるのか。」

馬子「い、痛い・・・」

鏡「やっぱり痛いんだね。」

鬼「まあ意識はうつすらあるからね。」

主「早く助けてあげたいね。」

鏡「ちなみに暗殺された天皇の

名前は思い出せない?」

鬼「思い出したよ。

崇峻(すしゅん) 天皇だよ。」

主「ありがとうー!!」

※人物ファイルを、書き換える

※2について

主「この仏像は何?」

鬼「信仰心が強い人だったみたいだからね。

地獄に落ちた時お守りとして

もらったみたい。」

鏡「あまり効果はないみたいだけど。」

鬼「心の支えにはなってるんじゃないかな。」

※ファイル馬子書き換え

意外に信心深い人のようだ。

※3について

主「これは何かな?」

鬼「馬子さんが生前作った

法律に関係するらしいよ。」

鏡「つまり馬子さんの業績だね！
ぜひ教えて。」

鬼「・・・うーん。
かまわないけど・・・
本当に聞く？」

主「!？」

鬼「あまりイメージのいい法律じゃないな・・・」

鏡「聞くのが怖いけど・・・
どんな内容？」

※余白にボタンが表示される
どちらでも先に選べる

【身分制度を強化する法律】

【天皇に従えと書かれた法律】

【身分制度を強化する法律】を選んだ場合

鬼「人を階級に分けて
支配するんだよ。
まず12種類の色の冠を
用意するの。
そして階級ごとにそれをかぶせる・・・」

主「それは・・・自分のテストの成績を
廊下どころか、
頭に乗つけて歩くってこと？」

鏡「で、でも。
能力で人を選ぶのは
いいことじゃないかな。
公平だし。」

鬼「・・・馬子さんは
どの階級だと思っ？」

※プレイヤーがボタンを選ぶ場面

【一番上】

【一番下】

【実は知らない】

鬼「一番上だよ。」

鏡「馬子さん、優秀だね。」

鬼「違っよ。」

馬子さんは冠を与える側。
だから無条件で一番上。」

主「・・・しょ、しょっけんらんよう・・・」

鬼「それに実際は、有力者の息子が
どうか、とかが関係してたらしい。」

主「立派なのは建前だけ・・・か。」

※証言ファイル更新

【天皇に従えと書かれた法律】を選んだ場合

鬼「閻魔様が持ってた「クピー」を
読んだことがあるよ。」

鏡「内容は？」

アマテラス様が感心するような
立派な内容？」

鬼「うーん。どうかなあ。」

天皇に従え、っつかいてあったな。

あとは・・・そうそう・・・

お役人は朝早く出てきて

しっかり働け、だって。

夕方遅くまで帰るなって書いてあった。」

主「人々を社畜にする気満々だね。」

鬼「お説教が、17個もあつたらしいよ。」

主「天皇の言うことを聞け、か。」

鏡「敬ってるのか、見下してるのか、どっちなんだ。」

鬼「実は、、当時の天皇は、

馬子さんの身内なんだよね・・・」

鏡「天皇に従えってことは、そのバックにいる自分に従えってことか・・・」

※証言ファイル更新

※4について

鏡「今日もお願ひしますね。

祟り神の皆さん。」

※怨霊が蠢くSMが入る

鬼「こつやって24時間体制で、

馬子さんに不安と悪寒を

与え続けてるよ。」

主「いっぱいいついてるね。」

鏡「たくさん殺したみたいだからね・・・」

※蘇我馬子の4箇所を全て読むと強制的に次へ再度小鬼登場

鬼「弁護士さんは、馬子さんの弁護を

引き受けるんですしよ？」

でも・・・正直やめた方が

いいと思うよ。

馬子さんは国内の政治でも

こんな感じだけど、

それ以外もあまりよくないって

聞いているから・・・」

主「それ以外って？」

鬼「・・・いや、なんでもない・・・

とにかく頑張ってね。」

※必要な情報を全て取得したら強制遷移

場面 調査画面を終え、

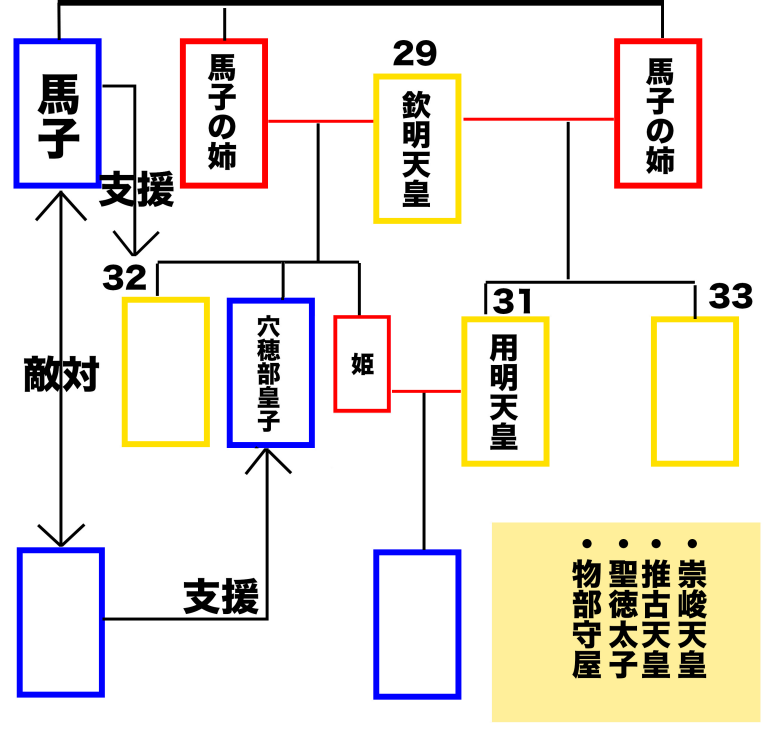
一度メインに戻る。

これから鏡が持っているデータを検証する、

と会話する二人

主「次は鏡ちゃんが持っている
データを検証してみよう。」

※まずは家系図



主「馬子さんの周辺の家系図みたい。

データはバグがあって、おかしくなってるね。」

鏡「まず馬子さんを探してみよう。」

※プレイヤーに家系図をタップさせる

「馬子」の部分をタップさせる

主「左上にいるね。」

鏡「馬子さんの横に線が伸びてるね。

この場合はどんな関係を

表してるんだろう。」

※馬子の横に伸びている線を

赤枠で強調

※プレイヤーの選択

1 親子

2 兄弟・姉妹

3 夫婦

主「馬子さんから線が横に伸びて

馬子さんのお姉さんが書かれている。

ということは兄弟または姉妹だね。」

鏡「枠の色はどんな意味が？」

主「青色は・・・」

※プレイヤーの選択

1 男性

2 女性

3 天皇

主「赤色は・・・」

※プレイヤーの選択

1 男性

- 2 女性
- 3 天皇

主「黄色は・・・」

※プレイヤーの選択

- 1 男性
- 2 女性
- 3 天皇

鏡「黄枠の上の数字は・・・」

※プレイヤーの選択

- 1 即位した年
- 2 死んだ年
- 3 何代目の天皇か

鏡「欽明天皇と馬子さんのお姉さんの間に

赤い線が引いてあるけど。

この関係は・・・」

※該当部分を赤枠で強調

※プレイヤーの選択

- 1 親子
- 2 兄弟・姉妹
- 3 夫婦

主「赤い線で結ばれているのは

夫婦だろっね。」

鏡「じゃあ縦方向に書かれている

線は？」

※プレイヤーの選択

- 1 親子
- 2 兄弟・姉妹
- 3 夫婦

主「これは親子、かな。」

それ以外にもお互いの関係が
書いてある部分【敵対・支援】もあるね。」

鏡「これが家系図の基本的な見方だね。」

主「・・・」

鏡「どうしたの？」

主「ちょっと気になるんだけど・・・

このどこかに馬子さんが殺した

崇峻天皇が入るんだよね？」

鏡「まあそうだね。」

主「天皇の枠は2つ空いてるけど・・・

一人とも馬子さんの親戚じゃないかな？」

鏡「二人とも馬子さんのお姉さんの子供、だね。

ということは馬子さんから見ると・・・」

※プレイヤーの選択

1 いとこ

2 孫

3 おい・めい

主「自分の兄弟の子供は、

男の子ならおい、

女の子ならめいだね。

馬子さんは、天皇殺しだけじゃなくて

身内殺し、なんだね。」

鏡「とにかく家系図を完成させよう。」

※ここから実際に空欄をうめていく。

人名の候補から

プレイヤーに選択させる。

選ぶ順番は自由なため

道は複数ありますが、

プレイヤーが一番通りそうな道筋を記述します。

崇峻天皇を選択した場合

主「天皇枠は二つ。

でもどちらに入るのか
情報が全くないよ。」

鏡「でも崇峻天皇は

馬子さんに殺されてるんだよね。
とぅうことばっ。」

※プレイヤーが直接家系図の空欄部分をタップ

プレイヤーが右の黄枠を選んだ場合

主「左の枠は、馬子さんが支援してるもんね。」

鏡「となると消去法で右側だね。」

※右の黄枠に、崇峻天皇入る

自動的にもう一つは推古天皇が入る

聖徳太子を選択した場合

鏡「この人について今のところ情報がない。

でも『太子』だよな。

太子って『皇太子』とかの太子だよな?」

主「太子って・・・」

1 天皇を補佐する人

2 天皇を継ぐ人

3 天皇の先生

主「皇太子って天皇のあとを

つぐ人のことだよな?」

『○○天皇』じゃなくて

太子と書かれている、ってことは

天皇になる前に

死んじやっただらうね。」

鏡「太子になれるってことは

天皇の一族だったはず・・・
可能性がある枠は・・・」

※プレイヤーに直接タップさせる
一番下の青枠に聖徳太子を入れる

物部守屋をタップした場合

主「この人はたしか

馬子さんのライバルで

殺された人だよな？

その理由はわからないけど。」

鏡「ということは物部守屋の場所は・・・」

※プレイヤーに直接タップさせる
一番下の青枠に聖徳太子を入れる

※枠を全てうめると強制的に進展

主「もう一つデータがあったよね？

それもチェックしよう。」

※強制的に年表に遷移

場面 家系図の検証が終わり

次は年表への調査へ。

●581年を選択した場合

主「日本の年表だよな？

なんで中国の情報があるの？」

鏡「隋ってどこ？」

主「地図がついてるよー」

581 隋(国名)が約300年ぶりに天下統一

587 蘇我馬子が物部氏を滅ぼす

592 蘇我馬子が崇峻(すしゅん)天皇を暗殺

593 推古天皇即位

聖徳太子が摂政(補佐役)となる

600 隋へ使者を送る？(日本側には記録なし、中国側には記録あり)

603 冠位十二階を制定

604 十七条の憲法を制定

607 小野妹子を隋へ送る(遣隋使)

626 蘇我馬子死去

645 馬子の子供と孫が殺され

馬子の子孫は絶える

※一度年表を消して、地図を表示

鏡「ここが隋、か。」

今の国名で言うと・・・」

※プレイヤーが選択

【韓国】

【中国】

【北朝鮮】

主「隋は昔の中国なんだね。」

主「日本の年表なのに」

どうして中国のことが？」

鏡「中国は当時の先進国だからね。」

それが300年ぶりに統一されたんだから

大ニュースなんですよ。」

日本にも影響があったはずだよ。」

主「どんな影響？」

鏡「それをこれから二人で考えるんですよ？」

※証言ファイル更新

証言ファイル【隋】追加

●587年を選択した場合

主「馬子さんの悪事の一つだね。」

鏡「どうして物部さんと争ったのか・・・」

原因は現時点で不明・・・だね。」

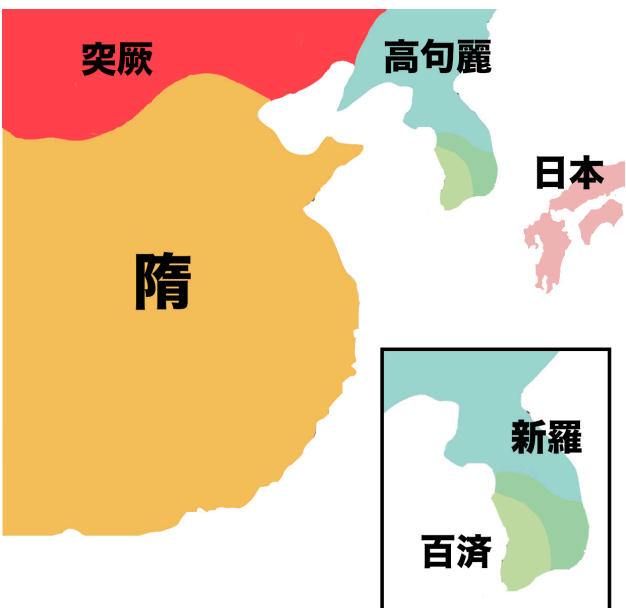
主「理由なんかあったのかな？」

ただ一番になりたかった

だけじゃないかな。」

鏡「自分の権力のためだとしたら・・・。」

より悪質だね。」



●592年を選択した場合

主「本当にとんでもないことしてくれたよ、この人は。」

鏡「暗殺の原因も今の所不明だね。」

●593年を選択した場合

主「推古天皇が即位したのは

崇峻天皇が暗殺されたから、
なんだね。」

鏡「推古天皇も自分の身内だから

即位しても問題なかったんだね。」

※家系図で推古と崇峻の位置を間違えて入れた場合

主「(あれ!?)

だとするとさっきの家系図

おかしくないかな?

あとでチェックしよう)」

●600年を選択した場合

主「これってどついつ意味?」

鏡「そのままじゃないかな?

日本が中国の隋へ使者を送ったけど、

中国はそのことを記録したけど、

日本はしなかった・・・」

主「なんで?」

自分で送ったんでしょ?」

鏡「記録ミス?

もしくは都合の悪い事でも

あったのかな。」

主「これは馬子さんとは関係があるのかな。」

鏡「当時の日本を仕切ってたのは馬子さんだからね。

使者を送るのにも

関係してたんじゃないかな。」

※情報ファイル更新

証言ファイル【隋への使者】追加

●603年選択した場合

鏡「なんだろう、これ。」

冠「位？」

主「ひょっとしてこれのことかな？」

※証言カードの中から特定のカードを選択

主「名前が分かっただけでも前進かな。」

●604年を選択した場合

鏡「なんだろう、これ。」

主「ひょっとしてこれのことかな？」

※証言カードの中から特定のカードを選択

●607年を選択した場合

主「また使者を送ってる。」

鏡「600年に送った時は日本側は

それを記録しなかった。

でも今回はそんな注意書きはない。

特に意味はないのか？」

●626年を選択した場合

主「馬子さん、死んでる・・・」

鏡「この年表で確認できる馬子さんが

関係しているような業績は、」

600 隋に使者を送る

603 冠位十二階制定

604 十七条の憲法

607 隋に派遣

くひらかな。

主「問題は、これらのことが

日本の歴史に貢献したかどうか、だね。」

※全て読んだ場合、強制的に次へ

※崇峻天皇と推古天皇が逆の場合、一度家系図へ

鏡「ひとまず家系図に戻って
うめられる部分を
完成させよう。」

※家系図へ戻る

※推古・崇峻を正しい位置へ

主「でもわからないな。
この家系図で見ると
馬子さんは崇峻天皇を
支援してた、って
書いてあるよ。」

鏡「・・・何かの情報が間違っているのか・・・」

場面 これまで調査は一通り終了したが、
最後に小鬼と少し話をする

※小鬼再度登場

鬼「調子はどつっ？」

主「そういえば、さつき『国の中の政治』もよくなかった、
って言ったよね。
ひょっとして小鬼ちゃんは、
このことを知ってるんじゃないの?」

※情報ファイルから、「隋への使者」のカードを提示

鬼「う、うん。」

閻魔様はあまりいいこと言ってなかったな。
まず最初に中国に使者を送ったの・・・。」

主「きつとこれだな。」

※画面に年表が表示。

プレイヤー、年表で900年を選択

鬼「でも・・・」

日本の政治が幼稚で意味不明だって馬鹿にされたらしいよ。

恥だから、記録にも残せなかったらしいの。」

鏡「年表の通りだね。」

鬼「数年後また送ったらしいの。

けど今度は、持って行った手紙が

物凄く無礼だったらしくて

相手を怒らせちゃったんだって。

ここに訳された書き写しがあるよ。」

【日が昇るところの天子から

日が沈むところの天子に

お手紙を送ります】

主「天子って?」

鬼「『天命を受けて国を治める者』

って意味だよ。」

天皇とか皇帝の別名で使われてたんだよ。」

主「2回目も失敗か・・・」

でも年表には記録なし、

とはなってなかったね。」

どうしてだろっ?」

鬼「さあそれはわからないけど。

とにかく外交音痴だった可能性は高いね。」

主「ありがとう。助かったよ。」

※情報ファイル更新

証言ファイル【隋への使者】更新

※小鬼去る

主「集められる情報はこれだけかな。

正直、馬子さんに関する前向きな情報は

あまりなかったね・・・」

鏡「作った制度は、自分の権力のため、
って感じが濃厚だし・・・」

主「それどころか、外交音痴の可能性すらある・・・」

鏡「でもやってみるしかないね。」

※馬子と、物部や天皇のものと思われる怨霊に向かって

主「頑張ってみるね馬子さん。」

崇峻天皇や物部さんの怨霊も

あんまり馬子さんをいじめないでよ!!」

・・・

鏡「・・・無視だよ。」

寝てるのかな?」

主「でも24時間無休怨霊システムだと言ってたのに。
とにかく勝負するしかないよ!」

場面 裁判がスタート

主「弁護士、準備は完了しました。」

天「結構です。」

裁判では、弁護側・検事側ともに

一人づつ証人が呼べます。

よく考えて選ぶように。」

閻「私の方はすでに決まっています。
すなわち物部守屋の魂を召喚します。」

場面 鏡に頼んで、

証人の魂をよんでいる。

※裁判再開

裁判では、弁護側、検察側共に

証人として魂を一人づつ召喚できる。

検察側は、物部守屋を召喚。

守屋は、馬子の悪口を言いまくる。

その悪口の中に、

「仏像を拜んでいる愚か者」と言う発言が入る。

天「ところで閻魔ちゃん。

馬子ちゃんはどうして

『天皇殺し』をしたのかしら。」

閻「順序を追って説明いたしましょう。

馬子がどれだけ身勝手なのか・

お分かりいただけたと思います。」

閻「まず家系図をご覧ください。」

閻「3代用明天皇が崩御した時

後継者争いが起きました。

後継者候補に上がったのは

この二人でした。」

画面 引き続き裁判画面

表示 家系図を表示

家系図の穴穂部と崇峻部分、赤枠で強調

閻「物部氏は穴穂部皇子と

繋がりが強く、

彼を支援しました。

それを気に食わない馬子は

崇峻天皇を支援したのです。

結局物部も穴穂部皇子も

馬子に殺されます。

そんな経緯で

崇峻天皇は即位したのです。」

天「わからないわね。

じゃあ二人は仲良しさん

だったんじゃないの？」

閻「馬子の残虐性を

軽く見てはいけません。

崇峻天皇は

馬子の言いなりでした。

そんな時に事件は起こります。

崇峻天皇に猪が献上されました。

日頃から不満が溜まっていた天皇は

『猪の首を切るみたいにな、

あの憎い奴の首も切りたい』と

こぼしてしまつたのです。

それを聞いた馬子は

俺のことだ、と怒り

崇峻天皇を殺害したのです。」

主「また不利な証言が・・・

馬子さん、とんでもないな。」

天「閻魔ちゃんの主張はわかりました。

馬子ちゃんの犯行は

極めて身勝手で残酷であると

言わざるをえません。

馬子ちゃんが地獄に落ちて

責め苦を受けていたのは

妥当な処罰だったと

言えるでしょう。

さて弁護士ちゃん。」

主「はい。アマテラス様。」

天「ここからが本当の歴史裁判です。

そこまでして奪った権力。

馬子ちゃんはそれで

何か歴史に貢献したでしょうか。」

閻「では本題に入りましょう。

すなわち、馬子に功績なし、

ということを証明して見せます。
年表をご覧ください、アマテラス様

天「鍵になるのは、

592年の天皇暗殺から

626年の馬子ちゃん死亡、

までの出来事ね。」

閻「おっしゃる通りです。

私が主張するのは

603年 冠位十二階

604年 十七条の憲法

です。」

天「どんな制度なの?」

閻「とんでもない『身分制度』です。

まずは冠位十二階から

解説いたします。」

まずは閻魔・冠位十二階について発言

★閻「差別的な身分制度です。
人々を階級で分けるのです。」

★閻「そして階級ごとに色の違う
冠を被せて支配するのです。」

★閻「階級を決めるのは
最高の階級にいる馬子だからです。」

★閻「馬子にいくら献金したかで
階級が決まるのです。」

★鏡「閻魔王は、

有罪を勝ち取るためなら

嘘もつく・・・

って噂だったけど・・・。

本当だね。」

★主 「墓穴を掘ったね、閻魔大王。
嘘の証言を暴いてやるう。」

※馬子に献金をした人間が
上の階級につけるのです。

発言に

証言カード「冠位十二階」を提示

主 「閻魔大王。

嘘についてはいけませんよ。

冠位十二階の階級は、

その人の能力によって

決めていたはずですよ。」

天 「そうなの？閻魔ちゃん。」

閻 「・・・これは失礼いたしました。

資料を間違えていたようでごめします。」

天 「気をつけてね。閻魔ちゃん。」

鏡 「そうだよそうだよ。」

閻 「しかし・・・

どちらにしろ同レベル。」

主 「!?!?」

閻 「馬子は階級を授ける側です。

馬子の影響がないはずがない。」

天 「確かにそうね。」

閻 「さらに十七条の憲法について
解説いたします。」

次は、閻魔・十七条の憲法について

★閻 「この憲法は現在の憲法とは

全く違います。」

★閻「今の憲法は人々は平等だと書いてあります。」

★閻「しかしこの憲法は真逆。」

★閻「馬子の命令は絶対である、と書いてあるのです。」

★鏡「また嘘が混じっているね。」

※馬子の命令は絶対である、と書いてあるのです。

の部分に証言カード「十七条の憲法」を提示

主「正確ではない情報が混じっていますよ。」

天皇に従え、と

書いてあったはずです。」

閻「これは失礼。」

しかしその違いは大した違いではありません。

天皇は馬子のめい・推古天皇です。

推古天皇に従えというのは、

自分に従えということです。

結局、自分の権力強化のための

道具にすぎません。」

天「なるほど。」

弁護士に反論はありますか？」

主「え・・・えっと・・・」

鏡「どうしよう・・・」

やっぱり調査で集めた情報通りだ。」

天「どうやら無いようですね。」

主「ちょ、ちょっと待ってください。」

天「!？」

主「まだ、議論する余地は・・・
残っています・・・多分。」

鏡「とにかくしつこく食いついて行かないと。」

天「それは一体なんですか？」

主「私たちは今、

『国の中の政治』に関して
評価しました。

でも『国の外に対する政治』の
評価がされていません。」

天「つまりあなたは

何について言っているのですか。」

※アイテム一覧から

「隋への使者」カードを提示

天「外交における功績ことですね？」

主「そ、そうです。」

天「閻魔ちゃん、どう思いますか？」

閻「私がかまいませんよ。

損をするのは

弁護士側であることに

変わりはありません。」

※閻魔・遣隋使について

★閻「当時の中国は、大国・隋でした。」

★閻「先進国・隋と国交を
結ぼうとしたのは、まあ結構。」

★閻「しかし馬子は、『日が昇る場所の天子から日が沈む場所の天子に』などと手紙を書いたのです。」

★閻「隋の皇帝は当然怒り、危うく日本は攻められるところでした。」

★閻「これが600年の失敗外交です。記録に残せなくて当然ですなあ。」

★鏡「・・・あれ？」

集めた情報と違う食い違う部分がある・・・」

※

これが600年の失敗外交です。記録に残せなくて当然ですなあ。
「隋への使者」カードを提示。

主「閻魔王。」

また情報が間違っていますよ。

『日が昇る沈む問題』は607年の外交の時です。」

閻「そ、そうだったかな・・・」

天「でも弁護士ちゃん。」

じゃあ600年の記録はなぜないの？」

主「それは決まっていますよ。」

600年は違う失敗をしたからですよ。だから書けなかったんです・・・

あれ？」

鏡「・・・」

じゃあどうして大王はそれを言わなかったんだろう。」

主「馬子さんは隋との外交で
多分2回失敗をしている。
それをわざわざ一つにまとめて
証言をした・・・」

鏡「その理由は？」

※900年の失敗外交に何かあると考え、
事情を知っている当時の隋の皇帝に
話を聞こうと考える弁護側

主「900年の外交は失敗だったけど、
閻魔大王にとって何か知られにくい
要素があるんだよ。
アマテラス様。
弁護側は被告を弁護するために
ひとりの魂を召喚したいと考えます。」

天「それは誰ですか？」

主「それは・・・900年の隋の皇帝です。」

天「・・・弁護側が招く魂は
馬子ちゃんを弁護してくれそうな人が
良いと思うのですが。」

主「かまいません。
日本側の、つまり馬子さんからの使者を
馬鹿にした皇帝を呼ぶことを許可してください。」

天「まあ、私がかまいませんよ。」

※鏡、隋の皇帝を招魂

場面 鏡に頼んで、

証人の魂をよんでいる。

主「隋の皇帝陛下ですね？」

あなたはなぜ

日本の使者を馬鹿にしたのですか？
それを証言してください。」

★皇帝「お前の国の政治は
どんな制度だと聞いたのじゃ。」

★皇帝「【天を兄として、日を弟としている】
などと意味不明な回答をしてきた。」

★皇帝「我が隋は、わしの命令一つで
大運河を作る工事ができるほど
まとまった政治をしておった。」

★皇帝「科挙(かきよ)すらやっていたのだ。」

★皇帝「馬鹿にもするじやる。」

★天「時間がないから

質問は一つだけにしてね。

中国の神様に怒られちゃうわ。」

鏡「わからない用語があったら
それを解決しておこう。」

※科挙(かきよ)までも行なっていたのだ。
にたいして質問。

主「その「かきよ」とはなんですか?」

皇帝「知らんのか?」

役人を試験で採用する制度じゃよ。
わしも死んでから知っただんじやが、
当時そんなことをしている国は
なかったらしいぞ。

豪族が世襲するのが普通じゃからな。
お前の国もそうじゃった。」

主「も、もう一つだけ!」

907年にも使者が来たことを

あなたは知っていますか?」

皇帝「こりずにまた来たのか？
知らんよ。」

わしは604年に死んでるからな。」

主「あ、ありがとうございますー！」

※皇帝、消える

画面 引き続き裁判画面

表示 裁判画面デフォルト

主「（よしー多分つながったー）」

天「あんまり弁護にならなかったわね。」

主「いいえ。そんなことはありません。

情報をまとめてみよう。

皇帝の発言の中でこれとこれを

注目しよう。」

①我が隋は、わしの命令一つで

大陸を貫くような大きな工事ができるほど
まとまった政治をしておった。

②科挙(かきよ)すらやっていたのだ。

この2つの発言と関係がありそうな証言を
選んでみよう。

※①には十七条の憲法

主「隋の皇帝はすごい権力を持った

独裁者だったんでしょね。

でもだからこそ大きな事業ができた。」

※情報ファイル十七条の憲法書き換え

②には冠位十二階のファイル

主「当時は、世襲が当たり前だった。

今では能力主義は珍しくないけど

当時は画期的だったんだよ。」

※情報ファイル冠位十二階書き換え

主「アマテラス様。

もう一度内政について
訂正があります。」

鏡「ここは重要だよ。」

【十七条の憲法と冠位十二階は

国外からの視点を加えると

価値がわかってきます。

超大国・隋は、

能力主義と権力の集中を

取り入れた国家でした。

冠位十二階と十七条の憲法は

日本なりにこの2つを模倣した結果なのです。】

※この文章に空欄を設け、選択肢を用意し、
プレイヤーに選択させる

主「900年の外交は記録に残せない程の失敗でした。

しかし馬子さんや推古天皇・聖徳太子達、

つまり当時のリーダー達は放置しませんでした。

そこで制定されたのが

2つの法律です。

冠位十二階と十七条の憲法についての

閻魔大王の主張は、

物事の一部分しか見ていない

と言っているでしょう。

閻魔大王が外交に関して嘘をついたのは

『成功の元になった失敗外交』を

隠すためでしょう。」

閻「だが！

607年の外交はどうだ！

とんでもない手紙を持参し

危うく国を滅ぼしかけたのだぞ！」

主「・・・果たしてそうでしょうか。」

閻「……びびるくらいだった。」

主「馬子さんは、
隋が日本を攻められないことを
知っていたのでは？」

※プレイヤーが選択

隋は当時、北方の高句麗に遠征しており
その遠征もうまくいってなかった。
そのことを年表か（高句麗遠征という項目を追加しておく）
地図（中国と高句麗が敵対していたことを矢印などで表現）で
前もって出しておく。
「すでに高句麗と戦っているから、
これ以上敵は増やせなかった」と
予想させ、地図、または年表を選択させる。
ちなみに、馬子は当時大陸の事情に精通していたという説がある。
このことも事前にどこかで書いておきたい。

主「馬子さんは大陸の事情に
精通していた政治家でした。
大陸の状況を知っていたのでしょう。
今なら強気な態度で行っても
攻めてくることができないと
計算していたのです。」

閻「と、とにかく！
馬子は、残酷な犯罪者だ！
天皇・物部殺害事件で
それは明らかだ。」

天「閻魔ちゃん、それは違うんじゃないかしら。
その罪は消せないけれど、
それに見合う功績があるかどうかを
問うのが歴史裁判よ。」

閻「ぐっ．．．」

主「アマテラス様のいう通り。
ただ．．
物部氏殺害に関しても
弁護することはできませんー！」

鏡「そうなの？」

主「やっとわかったんだよ。」

違和感の正体が。」

※物部守屋を召喚した時の発言内容に
主人公は、何か違和感を感じるが
正体がわからない、と発言させておく。

違和感の正体は、
最初閻魔は、物部守屋を信心深いと紹介したのに
守屋は、仏像を拝む馬子を馬鹿にしたこと。
馬子と守屋は二人とも信心深い、
信じているのは、守屋は日本古来の神様、
馬子は当時大陸で巻き起こった仏教の神様だった。
対立の原因は、単なる権力争いではなく、
当時の最先端の文化である仏教を取り入れ、
日本の文化度を上げようとした馬子と、
古来の神々を守るうとする守屋の争いだった。
（ちなみに物部氏の祖先は日本の古い神様であり
物部氏は祭祀を担当する豪族だった）
そのため、守屋との争いも擁護できると主張。

馬子を呪っていた霊も、物部氏や天皇の霊ではなく、
隅に追いやられた日本古来の神々の怨霊だった。
裁判に入る前に、守屋や天皇の霊だと思いつりかけても
返事をしなかったのはそのためであることにも行き着く。

天「弁護側の主張はわかりました。」

馬子ちゃんの行動に

身勝手なところがないとは

言いません。

ただ、歴史において

非常に画期的な政治を

したことも事実であると

考えます。

減刑とします。

馬子ちゃんは仏教に熱心だったようですから

極楽の文化財の管理員を命じます。」

馬子と弁護士、最後に会話を交わして終わり。